掲載日:2017年08月15日，面名:社会，記事ID:KIJ20170815_01003000100206008
(C)下野新聞社　無断複製転載禁止。

ヒロシマに生きる 下

被爆地の本県関係者

平和構築 農園で実践

「持続可能な生活、命を見詰めたい」

近藤 亮一さん・温子さん夫妻＝NPOスタッフ

まぶしい日差しを浴びて、トマトやキュウリ、ナスなどの夏野菜が鮮やかに輝く。「今年は上出来かな」。広島県三次市の山あいにある農園で、近藤亮一さん（29）、温子さん（28）夫妻は額の汗を拭い、再び農作業に取り掛かった。

夫妻が手掛けるのは、今春、本格始動したNPO法人「ピースカルチャービレッジ（平和文化村）」の農園。古民家での田舎暮らしを通じて平和を考える新たな国際交流拠点として、国内外から注目を集める。

奪い合いから脱却

2人が文化村に来たきっかけは、本県にあった。途上国の農村指導者を育成する那須塩原市内の学校法人「アジア学院」で亮一さんはボランティア、温子さんは生徒として国際協力や有機農業などを学んでいた。

転機は2015年秋。広島平和記念資料館などを運営する公益財団法人「広島平和文化センター」前理事長スティーブン・リーパーさん（69）が同学院での講演で、文化村の構想を語るのを聴き、心引かれた。エネルギーを過度に使わず自給自足を目指し、資源を巡る争いに歯止めを掛ける理念とする「奪い合う社会からの脱却」に共感した。

リーパーさんに誘われ、16年春に広島へ。亮一さんが事務局長、温子さんが農場長として運営を任され、築100年を超える古民家の大掃除や改修、田畑の手入れなどから、こつこつと農園造りを始めた。

「リーパーさんが連れてきた若い人」は地域ですぐに受け入れられた。地域の農業の〝先輩〟たちにも支えられ、今では米や小麦、オクラなど約30種を栽培。海外からの研修生も多く、「栃木で身に付けた知識が役に立っている」と実感している。

田舎暮らしで平和を考える「平和文化村」の運営を担う近藤夫妻。後方の畑で野菜を育てている＝広島県三次市

「栃木と似ている」

文化村代表のリーパーさんは、米国出身。37歳で広島に定住して被爆の実相を知って以来、「落とした側」ではなく「受けた側」の目線から平和活動に取り組んできた。「資源を使いすぎる今の世界で、豊かさに対する意識を少しずつ変えたい。国籍や宗教に関係なく、平和を考えられる場となれば」と力を込める。

賛同する近藤夫妻は「持続可能な生活を実践し、食を通じてその向こうにある命を見詰めたい」と目標を語る。「緑が豊かで栃木と似ている」というこの場所で、静かに平和のメッセージを発信する。